

**(土屋氏)** 巡回型では、そこで聞いたケースに対し、その場で丁寧に助言するという形に収まることが多いです。本来、丁寧なケースワークを目指すなら、一人のSSWで対応できるのは、大体5～10ケースと言われています。どんなに優秀なソーシャルワーカーでも10ケース以上同時に対応するのは、難しいでしょう。もちろん、巡回型でもキャッチしなければならないケースがあります。



**(横井氏)** 巡回訪問で行うのが助言なのか、そこからケース化して支援していくのかというのを、あらかじめ明確にした上で学校を訪問するのがよいかと思います。

**(土屋氏)** 私が巡回という形をとっていた時は、範囲が広域だったということもあり、ある程度テーマを決めて巡回をしていました。

例えば、まずは不登校のケースを中心に話をお聞きする、といったように。あるいは、重篤なケースを先に、というように、少し絞り込んだ上で巡回に行く方法も考えられます。

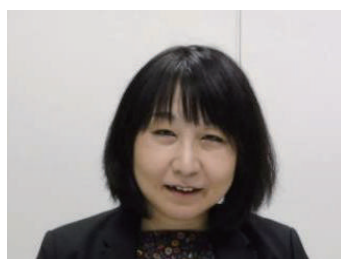
**(横井氏)** 巡回型では、最初は学校との関係が密ではないので、自立支援担当統括に、学校とYSWの「通訳」になっていただく必要があると思います。「通訳」に当たっては、学校の経営目標をしっかりと理解して、その学校の経営目標に対して、達成している部分と課題がある部分を十分に把握した上で、それを基に学校側の話とYSWの質問を有機的につなげるコーディネーターの役割を果たしていくことが重要だと思います。

**(事務局)** そうなると巡回訪問前に学校のニーズの分析と把握がある程度できていて、自立支援担当統括が、この学校の、この課題に対してYSWの支援を受けたいという目的意識が明確でないとなかなかうまく機能しないということですね。

この事業を発展させていくために様々な御意見をいただきました。この意見を参考に今後の運用方法等について、改めて検討していく必要があると感じました。

本日はどうもありがとうございました。

## 土屋 佳子氏



- 日本社会事業大学客員准教授
- スクールソーシャルワーカースーパーバイザー  
(福島県、東京都練馬区等)
- 都立学校「自立支援チーム」派遣事業統括スーパーバイザー、  
支援方針会議委員、スタッフ研修講師

## 横井 葉子氏



- 上智大学講師
- 文部科学省フリースクール等に関する検討委員会委員
- 都立学校「自立支援チーム」派遣事業統括スーパーバイザー、  
支援方針会議委員、スタッフ研修講師

注1 ダグラス・ジェイコブほか著 松本俊彦監訳(2010)『学校における自殺予防』金剛出版

注2 Response to Intervention については、馬場幸子著(2013)『学校現場で役立つ「問題解決型ケース会議」活用ハンドブック』明石書店 p.192の図を参照した。